



列福式に参加して

(一)

去年11月24日、長崎で行われた「ペトロ岐部神父と一八七人日本殉教者」の列福式は、式に参加した人は勿論のこと、映像などでそれに触れた人々をも含め、多くの人に感銘を齎しました。残酷な仕打ちを受け、命を捧げてまでも信仰を全うし、神の愛に応えた殉教者の生き方が、生ぬるい現代社会に生きる私達の心に強く響き、反省の機会となったことが主な理由かもしれません。また、いたいけない子供たちが、両親とともに殉教した多くの事実は、驚きとともに、家庭における信仰生活を省みる機会ともなりました。しかし、私は儀式とその雰囲気全体が、あの

前東京大司教

枢機卿 白柳 誠一

会場に居並ぶ人々に与えた影響が、人々の心を動かした殉教の事実と共鳴し、一人ひとりを、また会衆を包み込んだことを忘れてはならないと思います。

(二)

雨のなか、数多くの青年たちが懸命に奉仕している姿、あの会場設営のために、永い準備を重ねた信徒、修道者、司祭たちが、儀式直前まで心配して奔走している姿、またなるべく他教区からの参列者を受け入れるために、長崎教区の人々は参列者の数を極度に制限し、放映を通して

参加したこと、諸外国からも多くの参列者があつたことなどは、人々の心を動かしてやみませんでした。そこで人々が、観て、感じ、味わい、心を動かしたのは、実は聖霊の働きであり、聖霊が私たちに信仰共同体、「神の民」に属する喜びを与えてくださったのであると私は信じています。

「二人、三人がいるところに私はそこにいる」と言われたイエスのことばが思い出されますが、あそこで神の霊は、聖霊降臨のとき、キリストの弟子たちのうえに働かれたように、私達の心を開き、その賜物をもつて導いてくださったのです。奉仕した人、参加した人の努力、犠牲を嘉せられた神は、その人間の努力を超自然の力によって高めてくださったのです。

(三)

今こそ、私達は教会共同体、「神の民」の意識を深めて、すべての人が、キリストの体を成長させていくことに目覚めなければならぬでしょう。子供も、青年も、中年者、高齢者、健康人、病人も、すべてのキリスト者が、おのおのその立場で、

役割と使命を持っていることを思い出す好機です。キリシタン時代、迫害時代の信徒が実践したように。

私は「よき牧者の運動」のキャッチフレーズが大好きです。「暗いと不平を言うよりも、進んで明かりをつけましょう」。またケネディ大統領の演説の言葉「皆さん、皆さんは国が何をしてくれるかを問うのではなく、皆さんが国のために何ができるかを自らに問うてください」と話された大統領就任式の言葉を思い出します。

よき牧者の運動のモットーは、小さなことでも進んで行動する勇気をもとめるものであり、後者の言葉は、人が国という自分の属している共同体への積極的参加、行動を促しているものです。

(四)

第二バチカン公会議は、教会とは何であるかをはっきりさせてくれました。ステンドグラスは外から眺めるとき、真の美しさはわかりません。内側から見るときはつきりわかります。教会の姿も同じです。教会の内面的姿、秘儀としての教会の姿をみると、私たちの使命、働き、生き

方、祈りのあり方など、多くのことがよりはっきりしてきます。建物、組織など外面的要素も大切です。でも教会が信仰共同体、聖パウロの教えている人間の体に例えられている、キリストの霊に結ばれたキリスト者の集まり、「神の民」として捉えることが大切なのです。今回の列福式は、そのことを目に見える形、心に響くかたちで教えてくれたと言えると思います。

最後に、内側から見える教会の姿、すなわち教会の内的姿、秘儀としての教会の姿を、ほかならぬ諸宗教の方々もとらえておられたようだという事もつけ加えたいと思います。

列福式が終わって、退場の折、諸宗教の方々の席に赴き、あいさつをさせていただきました。あの長い儀式の後にもかかわらず、その表情は満ち足りた雰囲気にも包まれており、一口に感動ということばでは、表わせないほどのものでした。

どのような立場の人も、その立場立場で、本質に迫る生き方を志す者のみが響き合うことのできる世界を、共有できるのではないかと、ということを実感させられました。

列福式はそういう意味でも、神さまの、すべての枠を超える広大な秘儀の中で行われた、歴史的な一大イベントだったと思います。



Q & A

「列福式と

日本教会のこれから」



Q・少し意地の悪い質問で恐縮ですが、あれだけの圧倒的スケールの列福式でも、しばらくは感動が残ったにしても、いつの間にか忘れ去られてしまい、何も残らないのではないかと言う人もいるようですが・・・

A・それは感動の程度にもよるのではないのでしょうか。表面的な感動だったのか、心の奥にまで達したものだだったのかということ、これから一人ひとり問われていくのだと思います。

こんなイベントが行われる度に、よく次のような批判が聞かれることがあります。それは、たとえばビール瓶の外側のラベルは変るけれども、中身は決して変わらないという意見です。

公会議・福音宣教推進全国会議（ナイス）・二六聖人四〇〇年祭・西日本宣教師祭大会などがあり、また、聖体年、ロザリオ年、パウロ年など、ラベルは次から次と貼り替えられるけれども、その中身、たとえば、教会の引きこもり体質などは、依然として

不変であるということのようです。

具体的にはさまざまなことが言われます。教会の敷居が高いとか、上からの目線とか、電話の応対の仕方、責め口調など、決して改められることのない不動の体質があつて、これに傷ついた方々が多くいるのに、そこまで突っ込んだ変化の必要性は語られず、単に殉教者に倣つて熱心になるよう、言葉だけがむなしく響くというものです。

Q・今回のような歴史的イベントをもってしても変わることはないのでしょうか。

A・少々弁解してみても恐縮ですが、このような批判が当てはまるケースは、絶対的に少数派だと確信しています。長崎教区に限って、決してそのような状況が一般的であるとは思われないし、すべての人を受け入れるという教会の本質的使命を、懸命に追いかけている者ばかりだと思います。

二八年前の教皇訪日のときには、少なくとも教会の外側、すなわち日本の社会のカトリックへの見方が変わったと言われました。事実そうだったと思います。

この教皇訪日と一対を成す今回の列福式も、さらに一般社会の目を変えるにちがひありません。事実準備の過程でも、そのような変化が感じられました。

さて内部の変化はどうでしょう。もし「殉教者に倣う」という表現を、今後も用いる

のであれば、ラベルの貼り替え的变化では通用しないことは確かです。

決して「変わらないもの、譲れないもの」を掲げて、そのためにあらゆる責め苦に耐えて、その姿は見るかげもなく「変わり果て」、自らの命さえも「譲り渡した」殉教者に倣おうと、一端口にしてしまったのだからです。

譲れないものを掲げるといふことは、「譲るべきもの」を譲るといふことと一対だからです。

Q・辛口の質問ではなく、甘口の質問に切り替えます。この列福式に長崎教区外から来られた方々が、口をそろえて、ボランティアアスタッフの多さと、その働きに感動していました。これは、長崎教区はまだまだ捨てたものではないという証ではないでしょうか。

A・それは辛口でも甘口でもなく、厳然たる事実であり、何人と言えども、ここに批判のことばをさし挟むことはできないでしょう。ここで大司教様が3千人にも及ぶアスタッフの、責任者の方々に送られた、感謝のことばを紹介しましょう。

心からの感謝のことばを述べた後に「みなさんは この列福式において宣教活動をされたのです。それは自分たちができる能力を持ち寄って、役割分担をして、案内し、

受付、誘導し、主の食卓に参加者たちが与るのをお手伝いし、さらに社会のそれぞれの分野に、派遣されていくのを手助けしたからです」と。

まさに言われるとおりだと思います。一人でも抱え込んでしまつては何もできません。かといって、明確な宣教観なしに組織的行動をしても、適切な宣教活動にはならないでしょう。

「組織的に」とは「役割分担をして」という意味ですが、みんなで組織的にイエス・キリストのもとへ、すなわち主の食卓へ案内し、そして社会へと派遣していく、まさにこれが宣教活動そのものです。列福式において、文字通りこの実践の形を、長崎のボランティアの皆さんは天下に示したのです。

列福式の感動と一口に言いますが、その感動の出所はこの辺にあるのではないでしょう。

Q・列福式という具体的イベントでは、そのようなチームワークができたとしても、日頃の宣教の現場では、それは難しいのではないのでしょうか。

A・そんなことはありません。長崎教区には優れたコーディネーター（全体のまとめ役）としての主任司祭のもと、役割分担するためのシステムが整えられています。

かつては一人か二人、あるいは教会役員だけが仕事をかかえ込んで、忙しくて大変ということもありましたが、いまや全信者が一人一役を目指して、全体のチームワークの中で、宣教活動を進めるようになっていきます。

ですから列福式方式の日常化は、すぐにも可能だし、そういう日常活動がすでに始まっていたからこそ、あのような驚嘆すべき奉仕体制が、できあがったのだとも言えます。

Q・列福式後の日本の教会はどこに向かうのでしょうか。

A・カトリック教会といえどもその中には無数の考え方が混在しています。理屈だけにこだわるならば、それこそ「ああ言えばこう言う」の世界です。その議論百出の世界を「今の時点ではこうです」というまとめをしてくれる方々がいます。それが「教会の教導職」にある方々です。その方々の意見が結集され纏められたのが、ご存知の第二バチカン公会議が打ち出している路線です。日本の教会も、この路線にそって歩みを進めているわけです。公会議路線を一言で表現するとすれば、それは「ともにみんな」のことになるでしょう。

新しい要理

「共に歩む旅」

(16)

第十四課 「イエスの復活と昇天」



「進行係」(参加者を歓迎して、十字架の印をしながら集いを始める)

「どなたか祈りで神さまをこの集いに招いてくださいませんか。」
(誰でも自由な祈りを捧げるか、以下の例文で祈ってもよい)

・主よ、この集いに来てくださり、私たちの心をあなたの愛で満たしてください。

・主よ、ここにおいでくださり、私たちの鈍い心を柔らかくし強めてください。

A. 私たちの生活

イエスは死から復活され私たちとともにおられます。互いに愛し合う人々の共同体には、復活された主が実際に現存しておられます。そして私たちが目を大きく開き、

心を開くなら、私たちの生活の真ん中で働いておられる、復活された主を見ることができ、出会うことができますようになります。

「進行係」

「どなたか次の話を読んで下さいませんか。」

高校一年のとき、体育館のつり輪にぶらさがりたい一念で、器械体操を始めた。たちまち、その魅力にとりつかれていった。ただただ、体操をやりたくて、大学も体育科に進学。そして、体育の教師になった。が、二十四歳の六月十七日、わずか二ヶ月あまりで、私の教師生活は終わった。

肩から下のすべての自由を失ってしまったからだ。それからは病

院の天井だけをみつめる日々。文字どおり、手となり足となつて看病をしてくれる母との病院生活。生きる目的も見出せず、だからといって、自ら死を選ぶ勇気もなく、ただ生きながらえることの苦痛。

そんな矢先、口に筆をくわえて字がかけることを知った。絵もかけるようになった!! 私はやっと自分が生きてゆけそうな気持ちになった。絶望の淵からなんとかはい上がれそうに思えた。

故郷を出て故郷が見え、失つてみてはじめてその価値に気づく。苦しみによって苦しみから救われ、かなしみの穴をほじくっていたら喜びが出てきた。生きているっておもしろいと思う。いいなあ、と思う。

まだまだこれからだ。
両手を広げて待っているあの山のふところ、これから、私にしかできない文字をつづつていこう。

(星野 富弘「愛、深き淵」より)

「進行係」(参加者たちに質問する)

①彼は自分の病をどのように迎えたと思いますか。

②亡くなられた方や障害を持たれた方の中で、あなたに対し今も

力になっている方がありますか。なぜそうだと思いますか。

B. 神のことば

十字架の上で亡くなったイエスは復活されました。

使徒パウロは「キリストが復活しなかったのなら、あなた方の信仰はむなしく、あなた方は今もお罪の中にあることとなります。」
(Iコリント15・14・17と伝えます。)

「進行係」

「どなたかマタイ28・1・10(復活されたイエス)を読んでくださいませんか。」

・・・・聖書を読む・・・
「ほかの方がもう一度読んでくださいませんか。」

・・・・聖書を読む・・・
「次の聖書の句を一人ずつ順番に祈るような心で読んでくださいませんか」

「復活なさったのだ」(3回)

「大いに喜び」(3回)

「知らせるために」(3回)

「会うことになる」(3回)

【進行係】(参加者たちに質問する)

①弟子たちは復活された主に出会い、どのように変えられましたか。

②復活された主が話しかける「平和」のあいさつには、どんな意味が込められていますか。

イエスは復活されたのち「栄光のうちにあげられた」(「イテモテ3・16」)。

イエスはこの世に来られ、神の心を完全に果たされ、再び神であるおん父のもとへ帰られました。永遠の神の中でイエスさまは「昨日も今日もまた永遠に変わる事のない方」(ヘブライ13・8)として現存されます。

【進行係】

「どなたか使徒言行録1・6・11(イエス天に上げられる)を読んでもくださいませんか。」

【参考聖書】

*ルカ 24・13・35

エマオへ行く道で

*ヨハネ 14・1・7

道、真理、生命

*ヨハネ 20・19・29

弟子たちにお現れになったイエス、トマの不信仰

*ヨハネ 21・1・14

7人の弟子に現れたイエス

*一コリント 15・1・11

キリストの復活



C. さらに一歩進んで

旅をつづけよう

キリスト者の人生は、復活された主と一緒に歩む旅路です。イエスは、死が終わりではなく永遠の生に至る道であることを、復活を通して教えてくださいました。

【進行係】

(参加者たちに質問する)

①あなたは生きておられる主の現

存と愛をいつ感じますか。

②愛によって私たちに会われる主は、私たちにどんな喜びと変化を下さいますか。

③この世にだけ希望をおく人と復活された主のうちで永遠の生命に希望をおく人は、その人生においてどんな違いがあるでしょうか。

【進行係】

自由な祈りをささげながらこの集いを終ります。

【進行係の心得】

*イエスの復活を「死者のよみがえり」という面だけではなく、「ともに現存するイエス」としてとらえることが大事である。

【覚えましょう】

45・四旬節はいつですか。

*復活祭前40日間を四旬節といいます。

聖書で40という数字は回心と贖罪を通して生活を見直し、神に出会うために準備する期間として現れます。このような意味で、四旬節は回心と贖罪の時期であり、恩恵と希望の象徴である、

イエスの復活を準備する期間です。

46・復活節には、なぜ大きなローソクに灯りをもしますか。

*死の間に打ち勝った光の象徴として、復活のローソクをともします。

聖霊降臨の大祝日まで50日間、典礼の中で復活のローソクを灯します。

47・黙想とは何ですか。

*煩雑な日常生活を離れて、自らをふり返り、神の意志を探すことです。

48・黙想は、どんな姿勢で臨まなければなりませんか。

*自分の心を落ちつけて、次のような姿勢でのぞみます。

- ①自分の力だけで、結果を实らせるといふ考えを捨て、ただ神に自分のすべてを任せること。
- ②自分を縛るいろいろな執着と不安から脱出して、心を開き、神の光をまともに取り入れること。
- ③私たちが呼ばれる神のみ言葉に耳を傾けて、応答する準備をすること。

「2000年の歴史における 教会像の変遷と司祭の使命」(6)

森 一弘
(東京教区司教)



第39号
第5ステップの教会像
第6ステップの教会像
第7ステップの教会像

第40号
第7ステップの教会像
(つづき)

第41号
第8ステップの教会像
3.むすび

第8ステップの教会像

第8ステップの教会像は、根本からの変化が見られ、人間が見えてくるのが特徴です。人間の苦しみと悲しみに共感して、これにかかわろうとする姿勢が根底に芽生え、これを福音の原点として捉えた叫びが起ってきます。そしてそのことを中心にすえた教会に育てていかなければならない、というメッセージが発信されています。

最後のところに、現代世界憲章の引用文がありますが、そのまゝに福音宣教推進全国会議(ナイス)の資料の中に、この流れが出てきています。

みなさんの手元にあるのは、中央協議会の機構改革の資料です。これを斜め読みしていただければいいのですが、これは1980年代、司教協議会が、日本の教会を何とかしなければならぬ、ということとでまとめた文章です。

そこで皆さんは気づかれたと思うのですが、「日本の教会」という言葉が頻繁に出てきています。

例えば4番ですが「その際、視野を自己が所属している教区・小教区共同体のみに限ることなく、日本の教会全体を視野において、自分の教区の成長のために、共同作業を展開する独自性は保ちつつ、日本の教会全体のことを考慮することが要請される」と。

日本の教会が16教区に分かれた

とき、日本の邦人司祭は何人いたかを調べてみましたら、120人前後です。その中から、16人の司教を選ばないといけなかったのです。120人の中から、16人のふさわしい司教を選ぶということは、無理があったと言わざるを得ません。

当時それなりの事情があったと思いますが、相当な無理があったといえます。

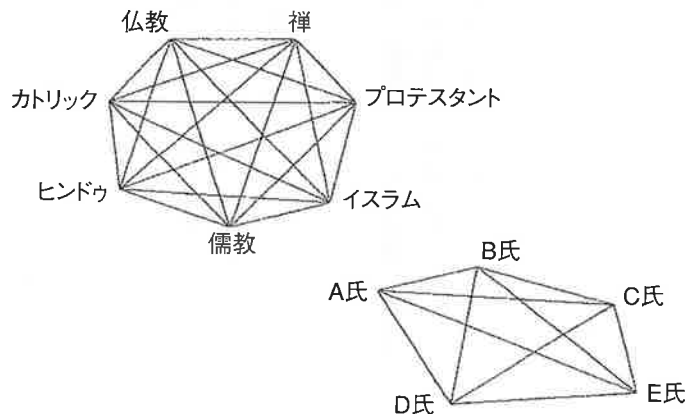
戦後、宣教会や宣教師がやってきて、海外からの有能な人材派遣や財政援助があり、日本の宣教は一時的によくたったように見えたのですが、それぞれが地域で独立していたため、力を合わせて発展することは出来ませんでした。

1970年代、日本では事実上38ぐらいの教区があったことが分かりました。それは教区と修道会がそれぞれ独立していたということです。

ある時期、ある教区の創立10周年の記念行事がなされた時に、その教区のある小教区の信者たちが、自分たちの小教区は外国の宣教会に世話になってきたのに、何で教区の10周年の祝いに、お祝金を出さなければならぬのか、という質問が出たと言われています。

それは自分たちが、教区という大きなまとまりに所属していることさえ、わかっていないということであ

り、そういうことが続いていたということでした。



日本全体を見たときに、そういうことが事実としてあって、そのことを踏まえて、もつともっと話し合っていかなければならないという共通理解を育てたのが、1980年代の司教たちです。

ここからナイス（福音宣教推進全国会議）が動き出してきたわけで、日本という社会文化歴史の中で、「日本の教会の中で」という視点を強調していかうとしたわけですね。

この時代の若手司教さまたちは、結構いろいろ発言されました。そういう発言をよくまとめたのもこの司教様達でした。そのような流れの中で第1回ナイスの開催が提言されたわけですね。

司祭・修道者・信徒が参加することによって、「日本の教会に対する神の民の責任と意識の高揚を図る」ということがナイスの目的になりました。

ナイスを理解するには、「日本の教会」という視点が不可欠であるということ、そして、実際に準備が始まったとき、その日本の教会の中に、生活と信仰の遊離、社会と教会の遊離があるということが、司教たちの共通意識になっていきました。

このことを克服するために、ナイスの運動をやるということになったわけですね。第7もしくは第6ステップの、教理・おきて・秘跡を中心とした発想から、現在の日本の社会に生きている人間に適応できるようにするには、どうすればいいかという発想だったと思います。

ナイスが開催されてから、頻繁に

出てくるのは「発想の転換」という言葉で、これがキーワード（鍵となることば）でした。その発想が何に向かって展開しなければならぬかということ、第二バチカン公会議に出てくる現代世界憲章のあの冒頭のことばです。「人間の悲しみや苦しみに神が動かされている、そこに心を合わせてかかわっていかう」とすることが教会の本質であるということ、それを中心にして今までの教会像を立て直しに向かおうという考え方が出てきたわけですね。

3. むすび

下記の横書きの部分ですが、先ず、源泉・原動力としての神があります。その原動力がキリストを派遣し、キリストが弟子たちを派遣し、そこにエクレジア（教会）が生まれ、そのエクレジアの本質は、神の心に動かされているのであるから、そのことを受けて教会も社会の人々、とくに苦しみを担っている人々に向かつて、動かされる必要があるという構図になります。

苦しみ嘆く人々に愛を吹き込み、そこに向かおうということですね。教会は愛の共同体であるから、その教会にも愛を吹き込まないといけない。その愛とは、神の人々に対する愛

であり、その愛は世界を再生させる、ヨハネ・パウロ2世の言う「愛の福音」です。このような一貫したものが、教会の流れとして生きてきていると思います。

ただし2000年もの歴史を生きてきた教会ですから、さまざまなのが染み込まれており、そう簡単に変わるものではないと思います。

当分は過ぎすぎずすることもあって、しようが、希望を失わずに、常に福音の本質・原点に基づいて、常に福音のダイナミズムを受け取って、自分の司教職・司祭職を育てていくということが、私たちに課せられた課題ではないかと思えます。ご静聴ありがとうございます。



結び

源泉・原動力： 愛の神

エジプトにいる私の民の苦しみをつぶさに見、(中略)彼らの叫び声を聞きその痛みを知った(出エ、3の7)

神は御独り子をお与えになるほど、この世を愛された(ヨハネ3の16)
群衆が、牧者のいない羊のように、弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた(マタイ9の36)

派遣 キリスト

疲れた者、重荷を負う者は、誰でも私のもとにきなさい。
私は柔和謙遜な者である(マタイ11の28,29)
私があなた方を愛したように、互いに愛し合いなさい(ヨハネ15の12)

派遣 使徒たち

全世界に行って、すべてのつくられたものに福音を述べ伝えなさい(マルコ16の15)、

エクレジアの誕生

- キリストを宣べ伝える
- 共同体の要・まとめ・管理…典礼の発展…権威の誕生
- 正当な教義を伝える
- 神に生涯を捧げる人々の誕生
- エクレジアの組織化…地域共同体への派遣

この世 労苦・重荷を負う人々…苦しみ・叫びを上げる人々への福音

人々に対する愛にみちたまなごし・共感
愛を吹き込む…愛による希望…愛による世界の再生

大司教談話室 ⑥

聖なる場所と生活



Q. 最近では聖堂や墓地などの聖なる場所、あるいは結婚やいのちの尊さに対する尊敬心が薄れてきたように思われますが、どう理解すればよいでしょうか。

A. 旧約の神の民は、多くの古代人と同じく、聖なる神との無限の隔たりを強く感じていたため、「聖別」すなわち儀式による選り分け、つまり分離によって神に近づこうとしました。幕屋、後の神殿は選り分けられた最も聖なる場所であり、聖別された祭司や大祭司が奉仕しました。エルサレム神殿では、異邦人、イスラエルの女性、男性そしてレビ人の順に神殿に近づき、神殿内の聖所には祭司、至聖所には大祭司だけが年に一回入ることができました。神殿の至聖所には、人間が直接見たり聞いたりすると、圧倒されて死ぬと言われた、無限の力と威光を帯びた神が臨在したからです。

祭司は12部族の中のレビ族、その中のアロンの家系の男性に限られ、聖別されて、聖なる場

所で聖なる時に聖なる儀式を行いました。このように、儀式による選り分けが繰り返されることによって地上から離れて神にたどり着くと考えられたのです。

しかし、切り離されて遠ざけられた一般の信者は、祭司や預言者を介して神とかわるしかなかった。一方、人々は、神殿で祭儀を盛大に行いながら、生活では悪や不正を行っていたのです。

彼らに対して、預言者たちは厳しく回心を迫り、聖なる神殿と祭儀は重要であるが、同時に聖なる生活をすべきであると教えました(アモス5・21、24、イザヤ1・11、17、エレミヤ7・1、11)。聖なる生活とは、神のことは、とくに正義と愛を実行することになりました(レビ記19章)。

ところで、神のことは人間となつてわたしたちの間に「宿られた」(ヨハネ1・14)、文字通りは「天幕を張った」のです。また、イエスが「神殿を三日で建て直す」と言われたときの神殿はご自分のからだのことでした(ヨハネ2・19、22)。

言い換えると、イエスご自身が神殿となり、イエスを通して父である神と交わる時が来たということです(ヨハネ4・23、24)。イエスが十字架上で息を引き取られたとき、「神殿の垂れ幕が上から下まで真つ二つに裂け」(ヨハネ27・51)しました。この垂れ幕が、聖所と至聖所の間にあった幕のことであれば、旧約の祭司職の終わり(ヘブライ10・20)を意味します。イエスが、神殿の境内(異邦人の庭)から商売人を追い出したのは、彼らが神殿の聖性を汚し

たというより、「祈りの家」(マタイ21・1)を「強盗の巢窟」つまり貪欲で不正な商売の場所にしたからでした(エレミヤ7・1、11参照)。(12・1、13)。さらにイエスは、ユダ族でしたが、「祭司」や「大祭司」と称されています(ヘブライ7・3、8・1)。実際は、聖なる町エルサレム城外で犯罪人として処刑されており(ヨハネ19・7)、彼の死には一見典礼儀式との共通は何もありませんでした。

しかしイエスは、ご自分のからだをささげることによって、わたしたちを聖なる者、完全な者としてくださいました(ヘブライ10・10、14)。それは、彼の死が神の望みになつた徹底した「憐れみ」の行為だったからです。

実際イエスは「わたしが喜ぶのは、愛であつていけにえではない」というホセアの言葉を繰り返すことで(マタイ9・13、12・7)、献げ物の奉獻を頂点とする儀式による分離の制度に対し、神から来る憐れみを広めることによって神に栄光を帰す方を選びます。

それは、分離によるのではなく、受け入れることによつて得られる聖化です。

神の子は、人々が彼のことを聞き、彼を見、彼に触れ、彼と交わることができるため人となり(ヨハネ1・1、3参照)、いのちを献げて復活し、ご聖体という秘跡を通してそのようなご自分のすべてをくださるのです。

このキリストと一つになつて愛を生きることに聖なる生活(コロサイ3・12、14)、真の礼拝になるのです(ローマ12・1、2、エフエソ5・2、3)。聖なる場所はこの生活の源泉と帰着点のほゞです。



分かち合いの こぼれ話し



長崎の地は、昨年11月の「ペトロ岐部と187殉教者」の余韻が熱く残されていることでしょう。

このような時に、さいたま教区の一教会よりこぼれ話しをおとどけ致します。

松が峰教会は、この教区では、大きい方で、多国籍の方も多く、毎年洗礼を望まれる方や、大人の求道者もあって、先の王であるキリストの主日には10名の入門式がありました。

この教会で、私は、5年前より宣教のお手伝いをさせていただいています。日曜日のミサ後に勉強会をもっています。最近では平均して15・6名の方が集まっています。構成メンバーは10代から60代、信者、求道者が大体半々のようです。どなたでも、お入りになれるので、新しい方もすぐに溶け込んで、生活を通しての分かち合いにもお慣れになって信仰、子育て、疑問点などフランクに話し合い、互いに向上するよい機会のように思います。その分かち合いより、皆さまにお断りしてご紹介いたします。

Uさん

「どこにそのエネルギーがあるの?」と不思議に思えるほど細身のUさんは、10数年前から地域の障害者、高齢者の福祉のためにNPOを立ち上げて理事長として、活動しています。ご家族は、ご夫婦二人で、ご主人は先ほど定年退職なさっています。家族伝来の宗教を大切に、カトリック信徒としても謙虚に信仰を証されています。

ある朝、朝のお祈り後、お二人で朝食をされていた時、ご主人は「あなたは、『神よ、今日わたしを照らし導いてください。自分のしたいことばかりでなく、あなたの望まれることを行い、まわりの人たちのことを考え、生きる喜びを……』と祈っているのに、先日、私が嫌なこと傷つくことを言いましたよ…」と。Uさんは「どうして、その時に」と問い返したかったが、確かな事実でしょうと思い、黙っていました。

Wさん

この家族は、ご主人がペルーの方でしたが、2年前病死され、今、二人の遺児(小5の男児、5才の園

児)をかかえ、介護の仕事に従事しています。

二人のお子さんは、洗礼をうけていて、母親もイースターに入信を望み、昨年11月に入門式を受けられました。

ある日、彼女が仕事から遅く帰宅して、「私は、化粧直しをしようと思い、その容器を開けると、水が入っている。『どうして?』と、頭はパニック状態、眠っている長男をゆり起こし、『触ったでしょう』と責めましたが、眠っていたその子は、事の成り行きがわからず、その朝は、怒りのうちに出勤して、同僚に話すと、その方は「それは、違うと思うよ、Kちゃんはしないと思う」と、私は自分の行動を冷静に振り返ると、自分でやったことに思い当たり、帰宅して恐る恐る玄関のドアを開け、子どもを見て、「Kちゃん、ごめんね。あれはママだったのよ」というと、「ママ大丈夫よ」と言って、父親を思いだすような力強さで私を抱きしめてくれ、励まされました」と涙の共感でした。

昨年('08年)のイースターに受洗されたMさん

奥さまは、フィリピンの方、二人のお嬢さん(中学生と小3)との家族です。受洗の動機は、「妻の死を恐れない姿勢、生き方に考えさせられた」と、それは、奥さまの強い信仰とフィリピンの土壌にあるキリスト教の精神性でしょうか?

このような学びの会で、毎週、ミサ後にお茶もないのですが、共に深い信頼に結ばれ、ゆるしの秘跡のような事柄を心から述べたり、時には大笑いしたりで、とてもなごやかな雰囲気です。

「神よ、変えられないものを受け容れる、心の静けさと、変えられるものを変える勇気と、その両者を見分ける英知をお与えください」

ラインホルド・ニーバー

マリアの宣教師フランシスコ修道会
シスター中村 淑子



直接宣教を

— 西日本宣教

司祭大会から一〇年 —

(一) ふりかえり

一九九九年十一月、ザビエル渡来450年を記念して「西日本宣教司祭大会」が開催されて、今年で十周年を迎えます。二四〇ページにおよぶ、この大会の報告書と、大会後三年目に提出された「提言の整理」をあらためて読んでみると、20世紀の終わりという節目にふさわしい、示唆に富んだものだったことが伝わってきます。いま日本教会はちよつとした「ふり返りブーム」が起こっているとも言えるでしょう。そのブームに便乗して、この大会の狙いを再検討してみたいと思います。

この大会は、ザビエル渡来四五〇年という節目を記念して、開催されたものではありませんが、そのテーマは、唐突に選ばれたものではありませんでした。

日本の教会は四十数年、公会議との格闘を続けています。その闘いは「開き派」と「閉ざし派」の闘いであり、「トリエント体制」と「第二バチカン体制」とのせめぎ合いとして現れました。

また、「教条主義」と「福音主義」のつな引きであり、焦点を小さく絞って個人のレベルで言えば譲れないものとして「キリスト」を掲げ

るのか「オレ」(自分)を掲げるのか、つまり「キリスト信者」なのか「オレオレ信者」なのかという、問いかけてまで迫られるような格闘でした。

(二) 西日本宣教司祭大会のテーマ

この大会で取り組んだテーマは主に三つありました。それは、(一)現代教会の宣教観を知り(二)その実践例を学び(三)現場からの提言を行うことでした。

現代教会の宣教観を知る上で、このとき出てきたキーワード(鍵となることば)は「パラダイムシフト」(考え方の枠組みが変化すること)でした。

これまで宣教というと、簡単に言えば、カトリック要理を暗記させ、洗礼を授けて終わりという単純作業でした。いわば教会のさまざまな活動の中の、一つの部門の活動であり、それも単純なマニュアルに従っていればよかつたわけです。

それがどのようにパラダイムシフトして行きつつあるかというと、一言で言えば、教会全体が「宣教一色に染まる」という表現が当てはまるかもしれません。

「教会は本性的に宣教者である」(宣教NO2)とありますが、これまで宣教とは関係ないと思われていたこと、たとえば典礼儀式にも、宣教的視点が入ってくる必要があるし、そうなるのはじめて、教会の典礼と言えることになりました。信仰教育も信仰を守るといふより、伝える人を育てるといふ視点で、行われることになりました。

これまで宣教活動は、ともすると司祭、或いはせいぜい修道者、すなわち勉強した人だけが関わ

ることのできる、一つの分野として考えられがちでしたが、司祭も修道者も信徒も、それぞれ役割分担をして、宣教に参加するのです。のみならず信徒でない方々とも一つになって、イエス・キリストの姿に近づく活動、すなわち、宣教活動に取り組もうということなのです。

このようにパラダイムシフトされた宣教のことを「福音化」ということばで呼ぶようになっていきます。

日本の教会は福音宣教推進全国会議(ナイス)から二〇年の振り返りを実施しました。

長崎教区も「邦人司教区設立八〇周年」を祝いました。さらに普遍教会(ローマ)の導きを受けて、「大聖年」「聖体年」「ロザリオ年」そして「パウロ年」という特別年を過ごし、その都度自己刷新の旗を掲げて取り組んできました。

列福式はまさに歴史の振り返りであり、これまでの振り返りの総仕上げともいえるべきものでした。このようにその都度、違った看板を掲げて、どのような違わないものを、つまりどのような一貫したテーマを追いかけてきたのでしょうか。その確固たる理念に裏打ちされた、具体的プランと、宣教現場とのつなぎを試みようとしたその形跡が、この大会の報告書に現れています。

(三) 具体的宣教プラン

この大会の第二のメニューは、この新しい宣教観に基づく、具体的宣教活動の、実際の形を学ぶことでした。それが大会二日目になされた、韓国のキム・スーハン枢機卿による、記念講演の内容

でした。

ご存知のように韓国教会は、その信徒数において、朝鮮動乱（一九五〇年）の頃から、二十倍近い伸びを見せています。

その背景に、指導層の確かなビジョンと、具体的形に従った、一貫した活動があったことは言うまでもありません。

その時紹介された宣教法が、今「小共同体づくり」ということばで言われている、総合的プログラムです。一般に「アシパプログラム」(ASP)とも言われますが、これはアジアの教会でとくに広まっている、まさに新しい宣教観を形に表したものです。

このプログラムは、とかく長崎では「外国もん」などと批判されることがありますが、それを言うなら、キリスト教そのものが「外国もん」であり、肝心なのはそれが本物であるかどうか、つまり人間の本性、すなわち人間の一番中心部分にびったりであり、かつ人間を根本から癒すものであるかどうかということなのです。

そのほんのさわりでしかありませんが、本紙四頁に「新しい要理」というタイトルで、カトリックでない方々をも含めた分ち合いの実践案が毎回紹介されています。

これだけでも本気で取り組むならば、福音化としての宣教が可能になること受け合いです。しかも専門的に勉強した人だけでなくともできますし、初めから、信徒でない方々も、参加することが出来ます。

「福音宣教」ということばをスローガンとして掲げれば、それでこの教会の中心的活動が進むわけではありません。具体的プランが加わっ

てはじめて動き出すことになります。

列福式で発揮されたように、長崎教区の役割分分担力、およびまとまり力は、まだまだ現代社会に通用するものがあります。

あとはこれを、日常の場であまりつなぎ合わせ、これに霊的肥料をつぎ込んで育てるかどうかだけです。

(四) 直接宣教

教会全体が「宣教色に染まる」という表現をすると、それでは直接洗礼を目的とした、直接宣教は要らないのかという議論になることがあります。宣教的環境を整えるという間接宣教は、直接宣教があつて初めて、意味を持つてくるのだと思います。

事実、長崎教区では、第二バチカン公会議後、洗礼を目的とした求道者向けの勉強が、結婚準備目的を除いて、ほとんど消えてしまっているという経緯があります。

二〇〇六年度の統計によると、長崎教区七十一小教区の中で、成人洗礼数が、かろうじて2ケタになっている小教区は、わずかに四つです。かつてはほとんどの小教区が求道者を十人、二十人と常に受け入れていたものでした。

列福式という、一大イベントを成しとげ、過去をふり返ったいま、未来に責任を持つべき時がやってきました。

それは殉教者に倣い、パラダイムシフトされた「福音化としての宣教」に、本気で取り組むこと以外にはありません。

(教区評議会副会長・橋本 勲)



記念講演
キム・スーハン枢機卿



基調講演



分団会

生活教会 の中の



川棚教会

フォトプラン 山本 富夫

川棚

国道二〇五号線から程なく山手に入った地に建つ教会堂。奇棟の聖堂は新しい時代を感じさせる。

教会の始まりは一九五〇年、コロンバン会のプリン師の赴任による。教育事業も開始したが、当時信徒は一世帯だったという。

二年後、スカポロ会に引き継がれ、一九六六年、現教会堂を建立。

一九七〇年、スカポロ会から教区に移管され、早岐と統合し小教区となった。

隣接する幼児教育の施設と教会堂は、杜事に重きを置く地にあって、ひとさわ福音の光を放っている。